
徳川埋蔵金の謎

ゆ -

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

徳川埋蔵金の謎

【Nコード】

N5975X

【作者名】

ゆ -

【あらすじ】

子供の頃から霊の見える慎吾は、箱根大学の1年生。そこで出会った、赤い眼鏡の先輩・リナ。ひよんな事から2人は、TV局での盗難事件を解決。しかし慎吾は、国内最高の霊能力者と言われる江浜に誘拐されてしまった。徳川埋蔵金をめぐって、番組プロデューサーである系見や、謎の人物が・・・慎吾やリナを狙う。慎吾の霊能力、そしてリナの天才的な数字の感覚で・・・2人は徳川埋蔵金の謎に挑む！

第0話 始まり（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

第0話 始まり

第0話 始まり

1992年6月・・・

「糸見さん！ 第一子である息子さんのご生誕！ おめでとうございます！」

TVSのとある一室。TVリポーターや芸能リポーター、新聞記者、TVカメラマン・・・20数名の報道陣が一人の男を囲んでいる。

糸見「ああ、ありがとうございます！」

報道陣の中心・・・晴れやかな笑顔でインタビューに応じる男。1990年代の日本を代表するコピーライター、そして作家でもある糸見だ。

TVカメラがアップで糸見の顔を捉える。

糸見「おかげさまで昨日の夜。息子を授かりました。

ついに僕もパパとなりました！ ありがとうございます！」

短髪で端正な顔立ちの糸見。特徴である細目はたれ目になり、終始口元のゴムが緩んだがごとくニヤニヤとしている。

「結婚からちょうど1年。

産まれたばかりの息子さんのご様子をお聞かせください！」

一人の芸能リポーターが糸見氏のそのニヤけた口元にマイクを近づ

けた。

糸見「ええっと……。そうですね。」

妻の陣痛から出産までわずか2時間という超安産でした。

息子は……。そうですね、口元は妻に似てかわいらしいんですけど。

まあ、正直顔は……。猿でした」

報道陣がどつと笑う。

「出産時の息子さんの体重はいくつでしたか？」

今度は別のベテラン女性リポーターが糸見氏にマイクを向けた。

糸見「4260gです」

報道陣から「おーっ」という深い歓声が沸き起こる。

「これはもう、産まれた時から元気なお子さんという感じですね」

糸見「ええ。僕と違って、大物になりそうな予感がしますね」

その言葉に報道陣はまたしてもどつと笑った。

「息子さんのお名前はもうお決まりになりました？」

3人目のリポーターが糸見氏にマイクを向けた。

糸見「ええ。産まれる前はね、日本男児らしく太郎にしよう！って

決めてたんですが・・・」

「違うお名前に？」

糸見「息子がね。その名前ではイヤだっではっきり言っんですよ」

3度目の笑いが報道陣を襲う。

「赤ん坊の息子さんが、太郎という名前を拒否した？」

糸見「ええ。あ、信じてないでしょ！ホントなんですよ！

太郎って呼んだら、すぐ大泣きするんです」

「では、まだお名前は思案中という事ですか？」

糸見「いや。決めました。実は色々な名前で息子を試みてみたら・・・

1つだけ、息子が笑顔になる名前がありましたね。」

「なるほど。反応したその名前を、息子さんに名付けたわけですね？」

糸見「ええ、その通りです」

「では・・・是非、息子さんの名前を！」

今まで以上に多くのリポーターが糸見氏にマイクを近づける。

糸見「ええっと。ほら、ちょっと大きめに産まれてきた子ですからね。名前は・・・」

カメラを確認した糸見。そしてカメラマンも糸見をアップにしたその瞬間……

直後その会見を放映していたTVSのワイドショーがCMを流し始めた。

TVではよくある、重大発表前のCMである。

1分半ほどのCMが明けると、先ほどの会見の続きが放送された。

「是非、息子さんの名前を！」

今まで以上にリポーターがマイクを糸見氏に近づける。

糸見「ええつと。ほら、ちょっと大きめに産まれてきた子ですからね。名前は……」

全ての始まりは……

ここからだった……。

（第1話へ続く）

第0話 始まり（後書き）

順番が前後しますが、【アマデウスの謎】の前作になります。【アマデウスの謎】を読んだ後で、こちらを読むと・・・色々な接点があり、楽しめるかと思います。ちなみに50話足らずで終了する予定なので。

第1話 出会い（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

第1話 出会い

第1話 出会い

2012年 4月2日・・・。

箱根大学では大きな体育館の中、盛大な入学式を執り行っていた。その入学式に参列してる新大学生の中に・・・慎吾はいる。

身長は162cmと小柄。髪の毛はクセっ毛があり、沖縄出身にしては線が細い。童顔のため、大人びたスーツ姿は、正直着こなしているとはいえなかった。

つい先月、沖縄のとある高校を卒業。大学受験で見事一発合格を勝ち取り、第一志望であった箱根大学史学部に進学。

慎吾「・・・」

大学学長の長つたらしい話・・・周りがあくびを連発する中、慎吾は目を輝かせて耳を傾けている。

初めての大学生活。初めての一人暮らし。初めての箱根の土地。

慎吾にとって、見るもの聞くもの感じるもの・・・その1つ1つが期待で胸一杯になるものだった。例えばそれが・・・ほとんどの生徒が聞き流している学長の講話であっても。

・・・。

長い入学式が終わった後、新入生を待っているのは学部ごとのオリ

エンターション。真面目な慎吾は大学生活における注意事項や、授業登録の案内について担当者の話に真剣に耳を傾ける。

配布された資料にしっかりと目を通し、時にはボールペンで資料のいたる所にチェックを入れていた。

大学の授業は「専門科目」と「共通教育科目」の2つに分けられる。

「専門科目」は慎吾の属している史学部の学生だけが受講する授業の事であり、「日本古代史A」「江戸文学」といった授業がある。

「共通教育科目」は、学部学科をとわず全ての学生を対象にした授業の事であり、専門科目と違い他学部の生徒と一緒に授業を受ける事になる。「心理学入門」や「論理学入門」他、100科目近い授業が用意されている。

資料を見ると授業内容や担当教官の案内があり、慎吾はこれからどの授業を選択しようかとワクワク感いっぱい悩んでいた。

箱根大学の授業登録は、ネット登録方式。箱根大学に限らず、最近の大学での授業登録はネットを介して行う事が多い。

自宅にパソコンを持たない慎吾は、大学のコンピュータ室で授業登録を済ませていた。実際に授業が始まるのは数日後。

（慎吾「早く・・・授業を受けたい！」）

この気持ちは日々膨らんでいった。

・・・。

2012年4月11日（水）。

待ちに待った大学の授業初日。この日最初の授業は、共通教育科目である「マス・メディア」である。

初めて大学で受ける授業に緊張している慎吾。引っ込み思案な性格ゆえ、目立たぬよう広い教室の一番後ろの左側の席に座った。3人が座れる横長の机の一番左端に座り、教室内を見渡す。

慎吾「・・・」

高校の時よりもさらに大きな教室。大きな黒板。多くの生徒。高校と違って、みな私服であるというのも違和感を覚える。

何よりも大学にはいろんな人がいる。

一番前の席には・・・インドネシアからの留学生が座っている。どう見ても30を過ぎたおじさんにしか見えない生徒もいた。綺麗に化粧をした女子大生が多いのも不思議な光景である。

リュックを背負ったまま授業を受けようとするオタクっぽい男子学生もいれば、上下ジャージ姿で授業を受けようとする女子学生もいた。

かと思えば派手な洋服、アクセサリーに身を包んだ女子学生もいる。

一番後ろの右側の席・・・慎吾の反対側の右端の席には2mは越え

ているであろう大きな男子学生もいた。きっとバスケの選手か何かに違いないと慎吾は思う。

慎吾「・・・・・・」

大学の教室で見る光景1つ1つが、慎吾に新鮮な感覚を与えた。

しばらくすると、白髪交じりのメガネをかけた賢そうな男が現れ、教壇に立つ。年齢は50歳前後といったところか。この「マス・メディア」の講師である経済学部の教授だ。

教授はメガネをかけ直し、学生を一瞥したあと口を開いた。

教授「えー・・・みなさん、初めまして。単位を落として2回目の人もいるかな。」

ははは。この授業では、日本のマスメディアにおける・・・

「

真面目な慎吾は、真新しいノートに教授の言う事をいちいちメモっている。3人がけの左側に座っていたが、残り2つは空席である。

授業が始まって5分。慎吾の1つ飛ばした右側の席に、遅れて着席する学生がいた。

赤いメガネで大きなポニーテール。慎吾はちらっとその女性を見た後、特に気にする事もなくまた教授の話に耳を傾けた。

教授「じゃ、講義日程を書いたプリントを配りますので・・・」

慎吾は前の席の生徒から渡されたプリントを、赤いメガネの女性に

渡した。女性は慎吾と目を合わせる事無く、無言で受け取る。

プリントを渡す際、初めて正面から女性の顔を見た。とても目立つ赤いメガネに、大きなポニーテール。少しばかり目つきが鋭く、目鼻立ちははつきりとした端整な顔立ち。慎吾の辞書にある言葉で言えば【美人】である。

女性は右手で頬杖をついたまま、ただ眠たそうに教授の話を聞いている。

慎吾「・・・」

少しばかり女性を気にしつつも、慎吾は再び教授の話に集中した。

大学の授業は高校と違って長く、100分単位で授業が行われる。慎吾は長い時間にも集中を切らさず、教授が板書する内容をしっかりとノートにとっていた。

何気に慎吾が右側を見ると・・・赤いメガネの女性はノートもとらず、ずっと右手で頬杖をついたまま。時々小さいあくびをしていた。

ふと教授が生徒に向けて講義に関する課題について言い出した。

教授「って事で・・・この授業を受講している生徒諸君には最初の課題を与えたいと思う」

一瞬教室の中がどよめく。

教授「例えば雑誌社とか、例えばTV局とか、例えば新聞社とか・・・

・
日本のマスコミが関係している場所へ足を運び・・・

仕事内容について取材し、それをレポートとしてまとめてくる事！」

言い終わらないうちに、生徒から「え〜」という重苦しい声が聞こえた。

教授「ははは。まあ取材といったら、何かしら気が引けるだろうか
ら・・・

見学で構わない。職場見学レポートな。小学生の頃、やつ
たろ？

もちろん自分達で、その職場の見学依頼もする事。それも
課題の1つだぞ」

慎吾は初めての大学からの課題について、一生懸命ノートにメモを
とる。

教授「最初の課題の締め切りは5月いっぱいだ。

そうだな・・・ゴールデンウィークなどを利用するといい。

400字詰め原稿用紙5枚以上という事で！」

教室の中がさらにどよめいた。

「え〜・・・」

「原稿用紙5枚も」

「めんどくせー」

教室のいたる所から「イヤだな」「めんどくさいな」といった声が聞こえてくる。

教授「はっはっは。新入生にとっては最初の大学レポートかな。頑張るように！」

何か質問は？」

教授の目の前にいた男子学生が挙手した。

教授「はい、君」

指さされた生徒は、座ったまま声をかける。

生徒「その取材は、個人でなくグループでも構いませんか？」

教授「ああ、構わない。1人でも5人でも、同じ場所に取材や見学をしてOK！」

ただしレポートは、各人の言葉でしっかりと書き上げる事だ」

生徒「わかりました。」

教授「他に質問は？」

今度は教室の真ん中あたりに座っていた女子学生が手を挙げた。

教授「じゃあ、真ん中の君！」

生徒「具体的にどんな内容を書けばいいのでしょうか？」

教授「それも自分で考える事」

生徒「あ、じゃあ・・・。」

例えば去年のこの授業のレポートではどんな事書かれていたか・・・

よろしければ聞きたいのですが」

教授「はっはっは。君、頭いいね。そうだな、去年のレポートだと・・・

マスコミの仕事に就くきっかけをまとめた生徒もいたし・・・

この仕事のつらい事や、やりがいを感じる事を聞いてまとめた生徒もいた」

質問した生徒はうんうんと頷いている。

教授「日本のマスコミにおける批判的内容をレポートした生徒もいたな。」

参考になったかな？」

生徒「は、はい！　ありがとうございます！」

教授が教室の生徒を再度見渡す。

教授「他に質問は？」

慎吾は手をあげようか迷っていた。どうしても教授に聞きたい事があったのだ。

慎吾「・・・・・・」

引っ込み思案な性格だが、この日大学での初授業というワクワク感が小さな勇気を与えた。

慎吾「は・・・・はい！」

思い切って手を挙げる慎吾。

教授「お？じゃあ、一番後の席の君！」

そして、教授に指名された。

慎吾「あ・・・・えっと。原稿用紙5枚以上と言ってましたが・・・・」

教授「ああ。まさか3枚でもいいかとか言わないよな？ だとしたら答えはノーだ」

慎吾「いえ、その・・・・例えば原稿用紙30枚とかでもいいですか？」

この日一番のどよめきが教室内を埋め尽くした。教授は意表をつかれたようで、一瞬目を丸くする。次の瞬間笑いながら教授は応えた。

教授「はっはっは！　もちろんさ！　何なら50枚でも100枚でもいいぞ！」

教室内のどよめきは耳に入っていない慎吾。教授の言葉に目を輝かせる。

慎吾「あ！50枚でもいいんですね！　ありがとうございます！」

依然ザワザワしている教室の声は耳に入らない慎吾は、笑顔でノートにメモしていた。

【レポートは50枚でもOK】

女性「あんださあ・・・」

ふと慎吾の右側から声が聞こえる。慎吾はニコニコ顔のまま右を見ると、赤いメガネの女性が眉をひそめ、右手に頬杖をついたまま慎吾を睨んでいた。

慎吾「・・・」

鋭い視線を受け取った慎吾は、顔をこわばらせる。

慎吾「あ・・・何・・・か？」

赤いメガネの女性は睨み付けたまま口を開く。

女性「あんださあ・・・」

女性は慎吾を見て何か言いたげな表情を浮かべたが・・・口から出

ようとした言葉を、大きなため息が阻止する。

女性「はあ……いや、いい」

女性は吐き捨てるように慎吾に短く言い放ち、また黒板の方を向いて2度目の大きなため息をついた。そして小さな声でボソツとつぶやいた。

女性「死ねばいいのに」

（慎吾「え!？」）

慎吾には確かにそう聞こえた。

（慎吾「し……死ねばいいのに?　　ぼ、僕が?」）

何故、彼女がそんな言葉をボソツと言ったのか全く理解できない。

「理由はわからないけど、何かすごいひどい事をしたらしい」と自分を責める慎吾は、見えない罪悪感に襲われた。

女性のつぶやきの後、講義が終わるまで……赤いメガネの女性を一切見ることができない。

慎吾「……」

慎吾にとって、大学で初めての授業は……3時間ぐらいに感じら

れる長いものとなった。

この時、慎吾はまだ知ることはなかった。

この赤いメガネの女性と・・・

徳川埋蔵金の謎に挑戦する事になろうとは・・・。

（第2話へ続く）

第1話 出会い（後書き）

次回予告

「死ねばいいのに・・・」

この言葉が頭から離れない慎吾。パソコン室で作業をしようと、席に座ろうとした瞬間・・・

隣に座っていた赤いメガネの女性と目が合ってしまう。
そして・・・

次回 「第2話 笑顔」

第2話 笑顔（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾。

初めての大学の講義で、空気の読めない発言をしてしまう。隣に座っていた、赤い眼鏡・大きなポニーテールの女学生に

「死ねばいいのに」

と言われてしまった。

第2話 笑顔

第2話 笑顔

2012年4月18日（水）。

大学で初の講義を受けてから、1週間が過ぎた。

ようやくキャンパスの雰囲気や、授業に慣れてきた慎吾。全ての講義を欠かさず出席し、大学一真面目とも思えるほど、毎日勉強に励んでいた。

大学の講義は、慎吾にとって非常に興味深いものばかり。軽快なトークで講義を楽しく盛り上げる教授もいれば、ちょっとした事ですぐ怒鳴る教授もいる。高校ではけして習うことのない内容で、どの講義も新鮮な気持ちで受けていた。

ただ1つの講義を除いて。

大学で最初に受講した「マス・メディア」の2回目の講義。慎吾は1回目に受講した時と同じ席に座った。そして慎吾の席の1つとばした右の席には・・・先週と同じ赤いメガネの女性が座っている。彼女を確認した瞬間

「死ねばいいのに」

この言葉を思い出した。

どの講義も短く感じるのに、この「マス・メディア」の講義だけはどうしても長く感じてしまう。右側にいる女性の方をちらりとも振

り向くことが出来ない。

以前として、何故彼女が「死ねばいいのに」と言ったのかは不明。講義中とはにかく教授に質問したい事があっても、慎吾は終始ダンマリを通した。

いつ何時、また「死ねばいいのに」と言われないかと不安になり、ちよつとしたトラウマ状態だ。

（慎吾「早く終わって欲しい」）

そう思ってしまう唯一の授業。そんな2回目の「マス・メディア」の講義が、何事もなく無事に終了すると・・・慎吾はすぐに教室を出て行った。

・・・。

昼休み。

慎吾は大学の「パソコン室」に入っていた。

このパソコン室は大学構内に10カ所設置され、大学生は出入り自由。箱根大学・学生証に埋め込まれているICチップをパソコン横のチップ読み取り装置にかざせば、ネットでもワープロでも自由に使う事ができる。

約50台のパソコンが設置された部屋の中。いつものクセで一番後ろのパソコンの方へと向かう。奥から2番目のパソコンが空いてい

たので、そこに座ろうと持っていたリュックを下に降ろした。

座ろうとした瞬間・・・その隣、一番奥のパソコンに座っていた人物と目が合う。

慎吾「あ・・・」

思わず声を出した。あの赤い眼鏡の女性だ。

慎吾「・・・」

手前にひいたパソコンチェア・・・ 慎吾は静かに戻して立ち去ろうとする。

女性「ちよつとあなた・・・」

その女性は、リュックを持ち直した慎吾に声をかけた。

女性「あんたさあ、普通に座りなさいよ。」

私の顔見てその場を去ろうとするなんて・・・失礼じゃない？」

そう言う女性自分のパソコン画面に視線を戻す。

慎吾「あ・・・えー・・・ あー・・・ はい」

しどろもどろに答える慎吾。戻したパソコンチェアを再度ひいてゆつくりと座った。

慎吾「・・・」

隣の女性を気にしながら、学生証を読み取り装置にかざしログインする。

女性「あたしさあ。人に気を遣われるのって、大っ嫌いなんだよね」

女性は自分のパソコンから視線をそらさず慎吾に声をかけた。

慎吾「あ．．． はい。すみません」

女性に向かって頭を下げるが、相手は視線を合わそうとせずにパソコン操作をしている。

慎吾「．．． ．．． 」

隣を気にしつつもネットエクスプローラーを立ち上げ、とあるページを検索し始めた。

慎吾がパソコンの前に座って3分。

女性「ちっ！」

隣の女性が不意に舌打ちした。

一瞬、自分の事に対してかと思った慎吾。ちらつと横を見ると、女性は正面のパソコンしか見ていない。どうやら自分の事ではないようだ、ほっと胸をなでおろす。安心したのも束の間。

女性「マジかよ！」

またしても隣から声が聞こえた。小さな声ではあるが、慎吾にははっきりと聞き取れる大きさだ。

慎吾は気にしないように、自分の作業に集中する。

女性「うわ、ありえねー！」

慎吾「・・・」

女性「ここで！？ コレ、くる！？」

慎吾「・・・」

しかし、隣から頻繁に気になる声が聞こえてくる。どうやら女性は、パソコン画面に向かって小声で叫んでいるようだ。

慎吾は・・・女性のパソコン画面を覗かないようにしてた。覗くとまた何かトラブルになりそうな気がしたからだ。

しかし・・・とうとう女性はこの言葉を発してしまう。

女性「死ねばいいのに・・・」

慎吾「・・・」

ハッキリと聞こえたこの言葉は、慎吾の胸を深くえぐる。おそろおそろ横を見ると、女性はパソコンの画面を向いたままだ。

慎吾「・・・」

意を決して、チラッと女性のパソコン画面を覗きむ。そして驚いた。

（慎吾「ま・・・麻雀!？」）

女性のパソコン画面には、麻雀ゲームと思われるウィンドウが開いている。麻雀ゲームに没頭し、どうやら自分が不利な局面になると舌打ちしたり、暴言を吐いているようだ。

突然女性が振り向き、慎吾と目が合う。

慎吾「あ・・・」

女性「何？」

慎吾「あー・・・いや、さっきから何か叫んでたので・・・気になつて」

女性は目を丸くした。

女性「あれ？ 私なんか言ってた？ やだなー、声出てたんだ。

うん。気にしないで」

女性はまた自分のパソコン画面に視線を合わせる。この後、どう会話をつなげていいかわからない慎吾。

慎吾「あ・・・麻雀、好きなんですね・・・」

自分なりに言葉を投げかけてみた。

女性「・・・・・・」

女性は目を細くして、また慎吾の方を見やる。

女性「あのね・・・気を遣われるの嫌いって言ったでしょ。

無理に会話しなくていいから。あんたは自分の作業だけやってりゃいいのよ」

叱られている感覚になる慎吾。

慎吾「あ・・・そ、そうですね。自分は・・・

TVSのホームページチェックしてるんです、ハイ・・・」

パソコン画面を指さす慎吾を見て、女性は小さなため息をついた。

女性「だからさー。無理に会話しようとしなくていいっての！

はい！ あんたはTVSのホームページ。私は仕事！

それでOK！ もうしゃべりかけないでいいから！」

慎吾「え、あ・・・はい。ごめん・・・なさい・・・」

女性は鼻息あらく、また麻雀のパソコン画面を見つめ始めた。

女性「まったく・・・」

粗い手つきでマウスをクリックする女性。しばらくすると・・・

女性「ん？」

何かに気づいたような表情を浮かべた。背筋を伸ばし、慎吾の方を向いた後声をかける。

女性「ちよつとあんた。さっき、TVSのホームページ見てるって言った？」

慎吾はキーボードを打とうとした手を止め

慎吾「・・・」

顔だけ女性の方に向け、無言で見つめる。

女性「だから、今あんたが見てるの・・・TVSのページ？」

慎吾はちよつと困った表情を見せた後

慎吾「あー・・・僕は・・・あなたに・・・

しゃべっていいの・・・でしょうか？」

女性は眉をひそめた。

女性「あー！ さっき、無理に会話するなって言ったのを気にしてるの？」

もうあんた・・・めんどくさいわね！」

そして・・・

女性「イライラする・・・死ねばいいのに」

慎吾に聞こえないよう、小さな声で言っただけだった。

慎吾「・・・」

しかしその言葉は・・・しっかりと慎吾の耳に入る。2度目の「死ねばいいのに」は、さらに深く胸をえぐり、泣きそうな表情をする
慎吾。

そんな慎吾の様子に気づいた女性。

女性「あ・・・ひょっとして聞こえてた？」

慎吾「・・・」

どんな言葉を返していいのかわからない。

女性「あー、気にしないで。【死ねばいいのに】は私の口癖だからさ。」

たまに相手に聞こえるように言っちゃうのよねー」

言いながら赤いメガネをかけ直し、ポニーテールを軽くなでた。

女性「だから、今あんたが見てるの・・・TVSのページなんです
よ？」

慎吾は相変わらず泣きそうな顔で声を出す。

慎吾「はい・・・」

女性は鋭い目つきでさらに慎吾に聞いてきた。

女性「これ、絶対あれでしょ！ マスメディアの授業のヤツ！」

慎吾「はい・・・」

初めて女性が慎吾を見てニヤリと笑った。

女性「あー・・・やっぱりね。あんたさあ、TVSに見学に行くの？」

慎吾「はい・・・。ホームページで局内見学の案内もあったので・・・」

おずおずと頷く慎吾。その様子を見た女性は、トレードマークの赤メガネをしっかりとかけ直し・・・

女性「私も連れてって！！」

さらなる笑顔で言葉を発した。

慎吾「え！？」

慎吾は目を丸くする。

女性「どれどれ？」

女性は慎吾のパソコン画面を覗き込んだ。

女性「あー、なるほどね。登録フォームに氏名や年齢、指定された
見学時間・・・」

必要事項記入して送信ってわけね。ふむふむ。」

慎吾を押し分け、TVSの見学案内のページをさっと目を通す。

慎吾「・・・・・・・・・・」

女性の大きなポニーテールに、視界をさえぎられる。

（慎吾「あ・・・・・・・・いい匂い・・・・・・・・」）

心地よい香りが慎吾の鼻をついた。

女性「あつた！ 見学者人数。ねえ、あんたさ、一人で行くつもり
だった？」

急に女性は慎吾の方を向いた。

慎吾「え・・・・・・・・・・」

ドキッとする慎吾。

慎吾「あ・・・・・・・・はい。1人で行くつもり・・・・・・・・です」

女性はニヤリと笑う。

女性「そうよねー。あんた新人生でしょ。まだ友達とかいなさそう
だしね。はは。」

OK！ じゃあ、見学者人数【2人】と・・・・・・・・」

慎吾のPCキーボードを勝手に操作した。

女性「はい。じゃあ他の必要事項はあんたが記入しといてね」

女性は満足した顔で、再び自分のパソコンを操作し始めた。

慎吾「あの・・・」

女性「なに？」

さっきと違って、機嫌の良さそうな表情でこたえる女性。

慎吾「なぜ・・・僕と？」

女性「いい質問ね。嘘つくの嫌いだから今のうちはっきり言っわね。」

あんたさ・・・

多分田舎者でしょ？」

右手で眼鏡を軽く持ち直した女性は、遠慮せずに目の前の男に【田舎者】と言い放つ。

慎吾「あ・・・はい。沖縄から来たばかりなんです・・・」

そしてそれを肯定する慎吾。

女性「やっぱりね、見ればわかるわよ。ふふん」

鼻をツンと上に上げ、満足げな表情を浮かべる。

女性「沖縄なら、地下鉄とかJRとかさっぱりわからないでしょ？」

慎吾「は、はい！ あれ、全然わかりません。

いつも切符売り場で困ってるんです・・・」

正直に応える慎吾。

女性「私がTVSまで連れてってあげるわよ」

慎吾「え！？」

予想外の言葉が返ってきた。

女性「優しいでしょ、私」

慎吾「え！ そ、そうしてもらえたら・・・嬉しいですよ！！

ホントは僕・・・TVSまでたどり着けるか心配で・・・」

女性「でしょー。うんうん。」

女性は目をつむり、^{うなず}頷く。慎吾は、初めて女性に対して笑顔を見せた。

慎吾「ホントは、とっても優しい人なんですネ・・・

ありがとうございます！！」

女性「いや、いいのよ　ふふん！」

深々とお辞儀する慎吾に、鼻を高々と上げる。

慎吾「じゃあ、早速・・・」

TV局見学・・・2人という事で送信しておきますね！」

その言葉を聞いた女性がニコツと笑った。慎吾は一生懸命、ページを熟読して送信内容に誤りがないかチェックしている。

女性「・・・」

しばらく女性は慎吾の方を見ていた。

慎吾「・・・」

慎吾は女性の視線に気づかずパソコン画面を凝視している。それを見て、だんだんと女性の表情が曇ってきた。

女性「あんたさあ・・・」

耐えきれずといった表情で慎吾に声をかける。

慎吾「え？　あ、はい・・・　何でしょう？」

慎吾は笑顔で女性に返した。

リナ「・・・」

いったん天を見上げた後、すぐに慎吾を睨み付ける。

女性「あなたと私、TVSに行くんでしょ？」

イライラ気味の声をかけてきた。

慎吾「え．．．はい．．．」

女性「じゃあさ．．．お互い、連絡取り合えるようにするのが普通じゃない？」

慎吾「あ！そうか！ えっと．．．どうやって．．．？」

首をかしげる慎吾。さらに女性はイライラを募らせる。

女性「普通携帯でしょ！ もう、めんどくさいなー、君．．．」

慎吾「あ、そうか！ そうですよ！ 赤外線通信で．．．」

女性「ちよつと待った！！」

慎吾「え？ まだ何か．．．？」

女性「うーん．．．」

女性はメガネの中心を人差し指で押さえ、数秒程悩んだ表情を見せた。

女性「ええい！ 田舎者だから仕方ない！！」

今度は諦めた表情を見せる。

女性「あのさ！ 普通、携帯のアドレスとか交換する前にさ・・・
自己紹介するのが普通でしょ！ てか、人としての礼儀、
マナー！」

慎吾「あ・・・」

女性の言葉を受けた慎吾。

慎吾「あー！ そうだ！ 僕、慎吾って言います。よろしく！」

笑顔のまま、お辞儀した。

女性「ふー。ま、いいわ。私、リナ。はい、じゃあ携帯出して。赤
外線でつと・・・」

2人はお互いの携帯連絡先を交換する。リナは慎吾の携帯を指さし

リナ「この大学で、私のアドレス知ってるのって・・・

今んとこあんただけよ。貴重だからね」

と言い放った。

慎吾「うん。リナさん、ありがとう！ ホントに優しい！

正直、僕・・・田舎者だから・・・

都会のルールとかマナーとか常識・・・いっぱいわかんない
と思います。

何かあったらまた教えて下さい！」

屈託のない笑顔をリナに見せる慎吾は、リナに対する苦手意識が完全に消えていた。

リナ「は？ めんどくさ。とにかくTVS行く日程決まったらメルしてよね」

慎吾「はい！ あの・・・ あと1つ聞いていいですか？」

リナ「何？」

ニコニコしながら慎吾が言う。

慎吾「リナさん、年、いくつ？」

リナ「・・・」

天をあおぐリナ。

リナ「あんたに教えるの・・・正直めんどくさいわね・・・」

慎吾「え？ 年を教えるの、そんなに大変な事ですか？」

リナ「違う違う。あんたに都会のマナーとか常識を教えるのがよ。

田舎の沖縄だと『県民、みな兄弟』みたいな感じなんだろうけどさー」。

都会じゃ、女性の年齢を聞くのは普通・・・」

慎吾「・・・」

ずっとニコニコしている慎吾。

リナ「……ま、いいわ。

私19歳。工学部の2年だからあんたより先輩よ」

リナは小さな溜息のあと、自分の年齢を明かした。

慎吾「あ、先輩ですか！　じゃあ言葉遣いも気をつけます！　リナ先輩！」

リナは複雑な表情を浮かべる。

リナ「だから気を遣わなくて……　まあ、いいわ。好きにして。

はい、じゃあお互いの作業に戻って仕事しましょうね」

慎吾「あ……はい。ホントありがとうございます！　リナ先輩！」

何度も何度もお辞儀する慎吾に……

（リナ「大学で『先輩』って呼ぶヤツ……いねーって……」）

少しばかり辟易^{へきえき}していたリナ。

リナ「まあ、でも……これで……

『マス・メディア』のレポート書いてくれるヤツ、キープ
つと……」

慎吾「え？」

リナは無意識に声を出していた。

リナ「なにせ、課題50枚でも喜んで書くタイプだしね。ふふふ・・」

慎吾には聞こえていないつもりだったが・・

慎吾「・・・・・」

もちろん慎吾の耳に、その言葉は届いている。

リナ「よし！ 国土無双！！！！ 今日はいいい感じ〜！」

麻雀ゲームに集中しつつ、声がもれ続けているリナ。

慎吾「・・・・・」

リナの見せた優しさの裏には・・・彼女のレポート執筆に、自分が利用されると知った慎吾。

（慎吾「でも・・・」）

不安な都会の地でナビゲートしてくれる・・・そんなリナの親切心の方が、慎吾にとっては大きかった。

慎吾「・・・・・ まあ、いつか」

見学人数【2人】のまま・・・見学希望の登録フォームを、TVSに送信した。

(第3話へ続く)

第2話 笑顔（後書き）

次回予告

TVSへ向かう新幹線の中で、リナの意外な特技を知った慎吾。そしてTV局では・・・さらなるリナの特別な能力に驚かされる事になる。

次回 「 第3話 リナの特殊能力 」

第3話 リナの特特殊能力（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 F i r s t s e a s o n

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾。

初めての大学の講義・・・隣に座った1つ上の先輩リナに「死ねばいいのに」と言われてしまう。

そのリナと・・・課せられたレポートのため、TV局へ行く事になった。

第3話 リナの特特殊能力

第3話 リナの特特殊能力

2012年5月3日（木）。

慎吾「遅いな．．． リナ先輩．．．」

携帯の時計を確認しながらつぶやく慎吾。

箱根湯本駅・駅前。午前10時にリナと待ち合わせていた。

現在の時刻は、午前11時30分。

時間にきっちりしている慎吾、すでに2時間も駅前で待ち続けている。

何度もリナの携帯に「いつ着くんですか？」とメールしたが、そのたびに「あと5分」という4文字が戻ってくる。

．．．．．

リナが慎吾の前に現れたのは．．．12時前。

待ちくたびれた表情の慎吾が、リナに声をかける。

慎吾「リナ先輩．．． 2時間遅刻ですよ．．．」

特に慌てて来た様子もないリナ。

リナ「あー、ちょっと準備に時間がかかってね。女はそういうもの

なの」

慎吾「でも2時間は・・・厳しいです・・・」

小さなため息をつく慎吾。

リナ「は？ 男が女を待つのは当たり前だっつーの。

それにあんた沖縄出身でしょ？

沖縄の人って、時間にルーズって聞くわよ？」

慎吾「いやいや・・・みんながみんな、そうってわけでは・・・
てか今日のリナ先輩、なんかおめかししてません？」

赤いワンピースに、赤いヒール。セレブっぽい白い帽子とブランドものの白いバッグ。

赤と白を意識したコーディネート・・・大人びたりナの姿がそこにはあった。

大学での私服とは違った雰囲気のリナを目の当たりにした慎吾。

慎吾「都会の女性って感じですね・・・」

思った事を口にする。

リナ「は？ それ、褒めてんの？」

駅構内に向かいながら、リナが眉をひそめた。

慎吾「もちろんですよ！ いつもより化粧も濃いし！」

リナ「……………」

さらに眉をひそめるリナ。

リナ「あんたさあ。天然で人に殺意与えるタイプよね……」

慎吾「いや、ホントに綺麗だなんて思ってますから！」

リナ「はいはい。どーも。まああんたのために、おめかししたんじゃないし。

てか、あんた。リュック背負ってモ口田舎者丸出して感じだわね」

慎吾に負けじと、リナも思った事を素直に口にする。

白のＴシャツにジーンズ。リュックを背負った非常にラフな格好の慎吾。

慎吾「いいんですよ。田舎者は田舎者らしくてね」

屈託のない笑顔を見せる慎吾は、リュックを背負い直した。

リナ「……………はいはい。じゃあ行くわよ。TVSなら1時間半ぐらいで着くから」

沖縄の人間が都会に出てきて、最初に戸惑うのが……
電車や地下鉄の乗り方である。

路線図の見方、切符の買い方、乗り換えの仕方、改札口の通り方……

・
これら全てが不安の対象となる。

リナ「小田原って駅で、新幹線に乗り換えるから。まあ私についてきなさい」

慎吾「はい！」

ナビゲート役がいてくれると、路線に関する全ての不安が払拭される。箱根に来て、初めて不安無しで電車や新幹線に乗る慎吾。リナの遅刻の事はすぐに忘れ去った。

・・・。。

2人は小田原駅で、新幹線に乗り換え・・・JR新幹線、こだま638号の自由席に座っていた。

リナ「2駅だけど、30分ぐらいかかるから。寝るなり本読むなり、好きにして」

そう言うとりナは、バッグの中から小さなノートパソコンを取りだし起動する。

慎吾「あれ？　こんなところでパソコンですか？」

リナ「あー、うん。ちよつと仕事あるの。」

30分あれば半荘2回はいけるし
ハンチャン

慎吾「え？　麻雀やるんですか？　新幹線の中で？」

リナ「だからこれ、仕事だつて。あんたさあ・・・

私が、ただの麻雀好きと思つてない？」

慎吾「思つてますよ？」

正直に返す慎吾。

リナ「あのね、このネット麻雀は電子マネー賭けてやるサイトなの。

場代を払つて、後は打つてゐる連中でリアルマネーのやりとりするのよ」

慎吾「ええ！？ オンラインカジノ・・・みたいなヤツですか？」

リナ「ま・・・合法じゃないサイトだけどね。アングラサイトの１つよ。」

慎吾「アングラ？」

リナ「・・・。アンダーグラウンド。つまり表には出ないサイトの事よ。」

紹介制度で登録して・・・あー、説明めんどくさい！」

リナはパソコンのキーボードをカタカタ打ちながら慎吾への説明を中断した。

慎吾「で、でもそれ・・・ギャンブルでしょ！？

よく大学生がパチンコや競馬にハマつて借金！とか聞きます。」

ヤメましょうよ、リナ先輩!!」

リナ「あー、はいはい。全然大丈夫だから。私、死ぬほど麻雀強いし。

このサイト、名前は公におおやけされてないけど・・・

プロも多い有名なサイトなの。その中で、超勝ってるから。はい、ちょっと集中するからダメってね」

そういうとリナは、キーボードをさらに高速で操作し始める。

慎吾「・・・」

慎吾は口から出そうな言葉を飲み込み、パソコン画面を静かに覗きこんだ。

・・・。

30分後、2人の乗った新幹線は品川駅に到着。ここで東海道本線に乗り換える事になる。

慎吾「リナ先輩すごい! 連続で1位を取ってましたよね?」

少し興奮気味の慎吾がリナに声をかけてきた。

リナ「言ったでしょ。麻雀は死ぬほど強いって」

慎吾「あ、あの・・・今の30分で、どれだけ勝ったんですか?

お金」

リナ「……ふん、まあいいわ。

場代さしひいて、純利益は1万円ちよっとってトコね」

慎吾「リナ先輩すごい！！ 30分で1万円！？

何で勝てるんですか？ 秘密があるんですか！？」

慎吾はさらに興奮した様子で語り続ける。

リナ「うつさいな……」

あんたはさ……ギャンブルしちやいけないタイプだから」

慎吾の肩をポンと叩く。

リナ「これ以上その話題は禁止。

今度は新橋ってどこまで行くから、切符買って来て」

そついうと慎吾を押し出した。会話を続けたかった慎吾だが、しぶしぶ切符を買いに行く。

（リナ「まあ……」

レポート書いて貰うから、ここは我慢我慢」）

券売機の前に立つ慎吾を見て、リナは小さく溜息をついた。

………。

予定では正午についてるはずだったTVS。2人が到着したのは午

後2時過ぎだ。

リナ「はい、私の役目はここまで。後はあんた」

TVSの玄関前・・・右手を腰に当てたりナがアゴで玄関をさす。

慎吾「了解です。ここまでの案内、ありがとうございます！

僕だと、こんなスムーズには来られなかったです」

苦笑いをしながらリナにお辞儀した慎吾。TV局に入り、事務で受付をする。

事務員にこの日の局内見学の旨を伝え、首からぶら下げるタイプの入局許可証を2つ受け取った。

そのうちの1つをリナに渡す。

慎吾「はい。この入局許可証を首にかけてください。

僕たちは今日、局内見学の許可を得てる証明になりますので。

この中にチップが入っていて、各所に設けられているゲートを通れます」

リナ「OK」

リナはすぐに許可証を首にかけた。

慎吾「この許可証を持たずにゲート通ると・・・

警告音がなって、すぐに警備員が飛んでくるそうです」

リナ「は、なるほど。ま、TV局だしセキュリティも厳重ってわけね。

で？ 次の予定は？」

慎吾「えーっと。1時からの局内見学に間に合わなかったので・・・」

リュックからTVS局内見学の案内を取り出す。

慎吾「次は午後3時に・・・第16スタジオで時代劇の撮影風景見学。

4時には、第2スタジオでクイズ番組の撮影見学。

6時には、ニュースの生放送の現場を見学という日程です」

リナ「ええ・・・。歌番組とかないの？ 男性アイドルとか見られるヤツ」

慎吾は今一度案内を見渡す。

慎吾「えっと・・・クイズ番組で、有名なお笑い芸人が出るみたいですよ」

リナ「超ー興味ない！ うわー、イケメンの芸能人見たかったのに・・・」

慎吾「あ、すみません・・・」

申し訳なさそうな表情をする。

リナ「別にいいわよ。じゃあ次の見学までは・・・1時間ぐらいあるわね」

慎吾「お昼ご飯にします？ まだ食べてないですし」

リナ「あんたさあ。TV局に来て、昼ご飯なんて食べてる場合じゃないでしょ。

私、行きたい所あるの」

そういうとリナはスタスタと歩き出した。その後を慎吾が追う。

リナは局内の見取り図版のところで立ち止まり、指でなぞりながらどこかを探すしぐさをする。

リナ「えつと・・・あつた！ ここね！」

何かの場所を確認したリナは、慎吾の事を気にせずまたスタスタと歩き出した。

慎吾「ちょっとリナ先輩・・・どこに行くんですか？」

リナは無言で目的地に向かって歩いて行く。やがて階段を下り、2ヶ所のゲートを通って薄暗い地下へとたどり着いた。

慎吾「・・・ここ、駐車場ですか？」

リナ「そう」

TVS地下2階にある広い駐車場。

慎吾「何でこんな所へ？」

リナ「ちよつとね・・・」

そういうとリナは、駐車場の中をランダムに歩き始めた。そして車の前を通り過ぎては、何かを確認する。

約10分。広い駐車場内を歩き回ったリナと、ただ後ろからついてきただけの慎吾。

慎吾「あの・・・リナ先輩？」

リナは慎吾の方を向いてこたえる。

リナ「うん！ 今ね・・・ジャニーズアイドルの【山嵐】がこの局にいるわよ」

慎吾「な・・・ 何でわかるんですか？」

リナ「車があつた」

慎吾「ええ！？」

大きな声を出して驚く慎吾。

慎吾「って事は、リナ先輩・・・」

【山嵐】のメンバーの車とかわかるんですか？」

リナ「まあね」

（慎吾「うわ・・・絶対アイドルのおっかけとかするタイプだ・・・」）

リナ「あー、あのね。ひょっとして私がアイドルオタクとか思っていない？」

慎吾「思ってますけど・・・」

素直に返す慎吾。

リナ「アイドルとか興味ないの、私は。興味あるのはイケメン！

私はイケメンをおかずにして、ご飯を食べる女子なの！」

赤いメガネをキュツとかけ直し、鼻高々に言い放つ。

慎吾「・・・」

アイドルオタクと、何が違うのか理解出来ない慎吾。

慎吾「だからって、芸能人の車をチェックするのは・・・

ストーリーカーの領域ではないかと・・・」

リナ「あんたさあ。どこまでバカ正直なの？ アイドルってのはね・

・
て
こういう事されるの、許容範囲と思ってるから大丈夫だつ

慎吾「・・・」

リナ「ホントは駐車場でウロウロしてる方が・・・

イケメン芸能人との遭遇率高いけど・・・

ここは警備員が、定期的にチェックしてるからなー」

慎吾「出待ちってヤツです？」

リナ「違う！ 偶然の出会いってヤツ！」

慎吾「・・・」

リナ「とりあえずここは出ますか。少なくとも【山嵐】がいる事はわかったし。

時間まで、局内ウロウロして・・・

偶然曲がり角で【山嵐】のメンバーとぶつかり・・・
運命の恋、始まり始まり」

陶醉した表情で語るリナ。

慎吾「・・・」

冷めた目で見える慎吾。

リナ「運命の恋に・・・いざ、しゅっぱーっ！ー」

こうしてリナは一人でスタスタと歩き出し・・・慎吾はまた、その後ろをついていく。

リナ「・・・」

一瞬リナは駐車場から局内へ入る入り口で止まり、今一度駐車場を見た。

慎吾「なにか？」

リナ「うん……。いや、何でもない。さ、行こう！

今日のおめかしの成果を発揮しないとね！」

リナは右手で拳を握り、気合いを入れる。

慎吾「……。あれ……。？」

ふと何かに気づいた表情を浮かべる慎吾。

慎吾「ちょっと待てよ……」

最近ネットで見た【山嵐】のニュースの事を思い出した。

慎吾「確か【山嵐】のメンバーが立て続けに交通事故起こして……

今、メンバーは運転禁止だってニュースで言っていましたよ？

メンバーの車があるっておかしくないですか？」

キョロキョロしながら局内を歩くりナは、慎吾の方を振り返る事なくこたえる。

リナ「あら……。芸能関係弱そうなのによく知ってるわね。

そう。確認した車は【山嵐】のマネージャさんの車よ」

慎吾「マ、マネージャー？」

リナ「そう。超売れっ子の【山嵐】は・・・

メンバー1人1人、個別にマネージャーがついてるからね。

そのメンバー全員の・・・マネージャーの車あったの。

だから絶対【山嵐】は、TVSで何かの撮影のはず！」

それを聞いた慎吾は、さらに驚く。

慎吾「リ、リナ先輩・・・

なんでマネージャーさんの車までわかるんですか？」

リナ「あるのよ。そういう芸能人のプライバシーに関する事を・・・
公表してるアングラサイトがね。

ストーカーレベルのファンが、裏で情報交換してるの」

慎吾「・・・」

リナ「私はイケメンと・・・

そのマネージャーの車のナンバー、全て覚えているの」

1年前。芸能人の自宅の住所や電話番号を載せた本の出版が、プライバシーの侵害に当たるとして発売禁止になるというニュースがあった。

慎吾「・・・」

その記事を思い出す慎吾。

（慎吾「そんなサイトが・・・あるんだ・・・」）

リナ「そのサイトには、抱かれない男1位の福山雅秋の車のナンバーや・・・」

携帯番号、自宅の場所まで載ってるのよ。すごいでしょ？

今日、福山さんは・・・TVS来てないみたい。残念」

慎吾「てか・・・なんでリナ先輩・・・ナンバーとか全て暗記してるんすか？」

リナはイヤらしい笑いを浮かべてこたえる。

リナ「しっしっし。そゆの得意なのよ、私」

その顔は得意満面だ。

慎吾「・・・」

驚きの表情を浮かべたままの慎吾。いくらイケメン芸能人が好きとはいえ・・・

（慎吾「本人の車やマネージャの車のナンバーを・・・」

全て暗記できるものだろうか？」）

思い切ってリナに聞いてみた。

慎吾「リナ先輩」

慎吾の前を歩くリナは振り返る事無く返事する。

リナ「なに？」

慎吾「ひょつとしてリナ先輩・・・すごい暗記の天才ですか？

歴史のテストとか全て100点満点だったとか？」

リナは立ち止まって慎吾の方を振り返った。

リナ「あのさー・・・。私、歴史って大っ嫌いなもの！

テスト、いつも赤点よ！」

慎吾「でも・・・でも、あんなにたくさんの車のナンバー覚えるって・・・

普通の人には無理ですよ！絶対暗記の天才ですって！」

リナは慎吾の目を見て、一瞬無表情になる。

リナ「・・・」

慎吾もリナの目を見つめる。

（慎吾「あ、あれ？何か変な事言ったかな？」）

リナは軽い溜め息をついたあと慎吾に告げる。

リナ「ま、いっか。いいわ、教えてあげる。

でも誰にも言わないって約束できる？」

慎吾は目を丸くする。

（慎吾「え？ 何かそんな深刻な秘密があるの？」）

慎吾は作り笑いを浮かべた。

慎吾「え、ええ。もちろんです・・・よ？」

リナは軽く目を閉じた後、真剣な表情で少し重そうな口を開いた。

リナ「私はね・・・」

【数字依存症】なのよ・・・」

慎吾「え？」

（第4話へ続く）

第3話 リナの特特殊能力（後書き）

次回予告

リナが称する「数字依存症」。

慎吾の目の前で、驚異的な能力を見せる。

しかしリナはずっとこの症状に悩まされ続けていた。

話を聞いていくうちに、慎吾はその症状の正体突き止める。

次回 「第4話 数字依存症」

第4話 数字依存症（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾。

初めての大学の講義・・・隣に座った1つ上の先輩リナに「死ねばいいのに」と言われてしまう。

そのリナと・・・課せられたレポートのため、TV局へ行く事になった。

第4話 数字依存症

第4話 数字依存症

リナ「だから・・・私、【数字依存症】なの・・・
それも、かなり深刻な・・・」

慎吾「な、何ですか？ その・・・
よくわからないですが？」

リナは慎吾の目を見た。

目を閉じ、少しばかり上を向き・・・そして目を開くと、また慎吾の目を見る。

慎吾「？」

意を決したように、リナは語り始めた。

リナ「なんつか・・・目に映る物が数字として頭に入ってくるのよね・・・」

私の意志とは関係なく・・・

だから車のナンバーとかもさ・・・
意識してないのに、勝手に覚えてるのよ」

慎吾「・・・」

すぐには信じられない話だ。

慎吾「あの・・・リナ先輩。冗談では・・・ないですよね？」

リナは目を閉じ天を仰いだ。そして小さなため息をつき・・・

リナ「財布！」

目を閉じたまま、慎吾に一言発する。

慎吾「え？」

キョトンとする慎吾。

リナ「だから、財布。出して！」

今度は目を見開いて、やや強い口調で慎吾に言う。

慎吾「えっと・・・ は、はい。財布ですね」

ジーンズの右ポケットから財布を取り出した。

リナ「小銭。何枚ある？ だいたいでもいいから」

慎吾は財布を開いて、小銭を数え始める。

慎吾「えっと・・・ 10枚ぐらいですかね？」

リナ「OK。じゃ、小銭を全て右手で持って握って」

慎吾「な、何を・・・？」

リナ「いいから、小銭全部握って！」

慎吾はワケもわからず財布の中にあつた小銭・・・10枚程度を全て右手に握った。

リナ「じゃ、右手を前に出して手の甲を上に向けて」

言うとおりにする慎吾。

リナ「深呼吸して、力を抜いて・・・」

慎吾は深呼吸をして・・・力を抜く。その瞬間・・・

バチーン！！！！

リナは慎吾の拳を・・・上から思いつきりひっぱたいた。

慎吾「あがつ！！」 あが 痛い

小さな悲鳴と共に・・・

チャリンチャリチャリリン・・・

握っていた小銭が、全てフロアに散らばる。

慎吾「ちょ！ リナ先輩、何するんですか！？」

リナは慎吾の目を直視して・・・

リナ「374円」

言い放った。

慎吾「え？」

リナ「今、あんたが握っていた小銭の総額よ。374円だったわ」
眉をひそめる慎吾。

慎吾「じよ、冗談・・・ですか？」

リナ「落ちた小銭拾いなさい。その後、文句あるなら聞くから」

リナは腕組みをして慎吾を睨み付ける。その迫力に慎吾は少し怖じ気づいた。

慎吾「・・・」

そして、すぐに小銭を拾い始める。

全て拾い上げた後、左手に小銭をのせ勘定する。
100円が2枚、50円が3枚、10円が1枚、5円が1枚、1円
が4枚・・・

慎吾「えっと・・・300・・・369円です・・・けど？」

リナは腕組みしたまま、慎吾の斜め後ろにある自動販売機に視線を移す。

リナ「そこ。その自販機の下に、もう1枚5円玉が落ちてるから」

アゴで自販機をさした。

慎吾「……………」

身をかがめ、自動販売機の下を覗くと……5円玉が1枚あった。

慎吾「さ……374円。え！？ な、なんで!？」

リナ「だから……言っただでしょ！ 数字依存症だつて!」

しばらく呆然とする慎吾。少しの沈黙の後、口を開いた。

慎吾「ま、マジックとかじゃないですよね!？」

恐る恐る聞いてみる。

リナ「あんたさあ……この状況でマジックって……意味ないじゃない!」

目に映った小銭の金額……勝手に頭に入ってくるの!」

慎吾「そ、そうなんですか……はあ……」

しばらく呆然とするが……

慎吾「そういえば……」

左手の人差し指と親指を額にあて、悩むポーズをする。

慎吾「そういえば…… 吾郎先生が……そんな話を……」

リナ「誰？ それ？」

慎吾「あ……高校の時の先生で……

なんていうか、オカルトとかUFOとか超能力とか好きな・

・」

瞬間、慎吾は何かを思い出したような表情をした。

慎吾「そ、そうだ！ 【レインマン】だ！！」

この言葉にリナが即反応する。

リナ「は？ 雨男？」

慎吾「映画ですよ、映画！ ほら！

トムクルーズと、ダスティンホフマンが出てた！」

リナ「知らない……私、映画観ないし……」

慎吾「映画の中で、ダスティンホフマンが自閉症の兄を演じてまして……

床に落ちたつまようじの本数を、即座に答えるシーンがあるんです。

今のリナ先輩と同じような感じです」

リナ「だから？ それ、映画の話でしょ？」

慎吾は目を大きく見開いて話し始めた。

慎吾「違います。あの映画に出てくる兄は・・・

実在の人物をモデルにしてるんです」

リナ「実在？ え？ じゃあ、リアルにそんな人・・・いるわけ？」

慎吾「はい！」

リナ「・・・」

ニコニコ笑顔の慎吾だが・・・リナは眉をひそめたまま。その表情は、半信半疑と言った感じだ。

慎吾「そうだ！ リナ先輩、パソコン持っていましたよね？」

貸してもらえますか？ 3分あれば調べられますよ！」

リナ「・・・」

2人は局内の長いすが置かれてある所に移動し、そこに座る。慎吾はリナのパソコンを起動し、ネットで【レインマン】から検索を始めた。

リナ「・・・」

その様子を黙って見ているリナ。

リナ「・・・」

リナは・・・自分が【数字依存症】とよんでいる症状について、深刻に悩み続けていた。

4年前のある時期から・・・この症状が表れた。症状が出始めた当初は、不気味で怖くて仕方なかった。目に映った数字はもちろん・・・お金や時間など、数字の情報は勝手に頭の中に入ってくる。そして自分の意志で、数字の侵入を抑える事が出来ない。

自分とは違う、別の意志を持った何かが・・・自分の脳を支配しているような感覚で、この症状は恐怖以外の何者でもなかった。ノイローゼ気味になりかけたりナを、ギリギリで救ったのは・・・その負けん気の強さだ。

子供の頃は、おとなしい性格だったリナだが・・・ある事をきっかけに、その性格が変わる事になる。

リナ「・・・」

脳に数字が入ってくる症状でノイローゼになってしまふのであれば・・・

それは自分の中に入ってくる「何か」に負ける事になると思うようになる。

数字が自分の中に侵入してくる事は止められないが・・・

それに屈する自分は許せない！

こうして・・・パニックになりかけた自分の精神を持ち直した。

（リナ「こんな症状・・・世界で私だけと置いていたけど・・・」）

慎吾「あつた！ ありましたよ！ 見てください、リナ先輩！」

慎吾はパソコンのディスプレイをリナの方に向ける。

リナ「……」

リナは注意深く慎吾が検索したページを読み始めた。

慎吾「……」

リナ「サヴァン……症候群？」

【サヴァン症候群】

知的障害や自閉症の人物が、稀に常人では持ち得ないような特殊能力を持つことがあり、その症例を総じて「サヴァン症候群」という。

特殊能力の例として

・西暦・月・日を言えば、即座にその日の曜日を答える事ができる。
いわゆるカレンダー算の能力。

（かけ算九九すらできない人物が、この能力を持つ事例も報告されている）

・どんな楽曲でも、一度聴けば完全にコピーしてピアノで演奏する事ができる能力

（この能力の保有者で、楽譜を全く読むことができない事例もある）

・一度見た風景や写真を、その細部まで完璧に絵画で再現できる能力

・1冊の書物を一字一句全て完璧に暗記できる能力

・大きな数の複雑な計算を即座にできる能力

これらの能力が例としてあげられる（その他にもたくさんある）。

リナ「……」

ページの隅々まで目を通す。真剣な眼差しでディスプレイを見ているリナに、慎吾が声をかけた。

慎吾「どうです？」

リナはページから目を話さず応える。

リナ「確かに……いくつか当てはまる。でも……」

自分に当てはまらないと確信してる事があった。

リナ「でも私、知的障害でもないし……」

過去ひきこもりだった経験もないわよ……

この症例って、そういう人になるんでしょう？」

慎吾「ちょっと待ってください・・・」

慎吾はリナの見てるページとは別のページを開いた。そのページには、自閉症についての説明がされている。

慎吾「ほら、自閉症ってのは・・・

ひきこもりとかでなく、脳機能障害の1つなんです。

これがどのようにして、特殊能力の覚醒に結びつくかは・・・

未だに全くの謎らしいですが・・・」

ページに書かれてある内容を簡略して言っているだけだが、リナは真剣に聴いていた。

慎吾「それに、交通事故とか頭に衝撃を受ける事をきっかけに・・・

特殊能力に目覚めたって話が、よくあるんです」

実際交通事故など、頭に大きなダメージを受けた人物が、事故後特殊能力を発揮するという例は世界でも数多く報告されている。

慎吾「以前お笑いタレントだった、北尾監督も・・・

バイク事故の後に、芸術的才能が覚醒したと言われているんです」

リナ「あ・・・映画見ない私でも、北尾監督は知ってる。

毎年ヨーロッパで映画の賞を取っているのよね」

慎吾「そうです！　今や世界的な映画監督。世界中には彼のように・

・
事故後、芸術や計算の才能を発揮した例がたくさんあるんです」

リナ「世界・・・中に・・・」

慎吾「だから・・・ひょっとしてリナ先輩。その症状が表れる直前・
・

頭を強く打ったとか、そういう事ありませんでした？」

瞬間、リナは大きなポニーテールをとめているシュシュを右手で握りしめた。

リナ「・・・」

慎吾の言つとおり・・・思い当たる節がある。シュシュを握ったまま慎吾を見つめ・・・

リナ「話したく・・・ない」

声を絞り出した後、口元をぎゅっと閉じた。

慎吾「・・・」

過去リナに何かがあったらしいというのを、慎吾は察した。

慎吾「あ！　いえ、言わなくていいですよ！　すいません。

僕はただリナ先輩のすごい能力について・・・

少しでも情報をとっただけですから。
話したくない事は話す必要ないですよ」

優しい笑顔を見せながら、リナに声をかける。

リナの後頭部に大きな傷がある事・・・

それ以上に、大きな心の傷をリナがおっている事・・・

慎吾がそれらを知るのは・・・もう少し先の未来だった。

リナ「そっか・・・じゃ、私みたいな人が、この世界のどこかにいるのね」

慎吾「そうです。でもすごいな、リナ先輩。麻雀が強いのもそれですか？」

リナはパソコンから目を離し、天井を見上げた。

リナ「そうね・・・1度でも対局すれば、その人の打ち方が全てわかるわね。」

それに一度見えた牌は勝手に暗記するから、残りの牌もある程度わかるし。

牌譜が勝手に頭の中に入ってくる・・・そんな感じかな・・・
」

麻雀を全く知らない慎吾は、とりあえずうんうんと頷いている。

慎吾「へー、やっぱりすごいですよ、リナ先輩は。」

僕、文系だし、数学は大の苦手ですし」

頭をかきながら、おどけて笑った。

慎吾「あー、サヴァン症候群・・・吾郎先生から話を聞いてなかったら・・・」

絶対にわからなかっただろうな」

リナは慎吾の笑う顔を見て・・・少し胸のつかえがとれたような気がした。

今まで・・・

数字が体を侵す・・・そんな気味の悪い病気を、世界でただ1人経験していると思っていた。

自分以外にも同じような感覚を持っている人間がいる・・・

そう思えるだけでも、リナの心には勇気がわいてくる。

慎吾「吾郎先生って、すごかったんですよ。オカルトの話を読ませたら・・・」

慎吾は珍しくリナにずっと話しかけている。リナはそれを制止するように口を開いた。

リナ「あんたさあ・・・私、気を遣われるのがイヤだって・・・」

そう言ったの、覚えてるでしょ？」

リナが落ち込み気味だと察した慎吾が・・・喋って、場を和ませようとしているのを見抜いていた。

慎吾は話を遮られても笑顔のまま。リナは小さな声で一言発した。

リナ「ありがとう」

瞬間、慎吾は口を開いてびっくりした表情をする。その慎吾の表情を見て、今度はリナが驚く。

リナ「な、何よ、その顔!？」

慎吾は驚いた表情から笑顔に戻った。

慎吾「僕、リナ先輩って絶対【ありがとう】って言わない人だと思ってた」

リナは驚いた表情から、眉間にしわを寄せる。

リナ「あんださあ。私だって感謝すべき時には【ありがとう】ぐらい言っわよ！」

ホントあんだって、天然で殺意与える時あるわよね!！」

慎吾「・・・」

ずっと笑顔の慎吾。リナの毒舌よりも【ありがとう】の方が圧倒的に嬉しい出来事だった。

リナも慎吾の笑顔に負けて

リナ「まあ、いいわよ・・・ふん」

と声を発した。やれやれといった表情の後、自然と笑いがこみ上げてくる。

リナと慎吾。

2人が出会ってから初めて・・・お互いが、心から笑い合えた瞬間だった。

その心地よい瞬間を打ち破る者が現れる。

「すみません、ちょっといいですか？」

リナの肩を後ろからトントンと叩く人物がいた。

笑顔のまま、視線を慎吾から背後の人物へと移すため振り向いたリナ。

リナ「え？」

その人物を見たリナの表情が固まる。

そこには制服姿の警察官の姿があった。

(第5話へ続く)

第4話 数字依存症（後書き）

次回予告

TV局内で、人気アイドルのバッグ盗難事件が発生。
盗まれたのは、リナの大好きなイケメンジャニーズアイドル。

バッグを盗んだ犯人に憤りを覚えたリナは・・・
犯人を捕まえようと画策。

そしてまだ見ぬ、リナの驚くべき能力が発揮される。

次回 「第5話 初めての事件」

第5話 初めての事件（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 F i r s t s e a s o n

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾。

大学の講義で知り合った1つ上の先輩リナ。講義の課題のため、2人でTV局へと向かった。

そこで慎吾は、リナの驚くべき数字の感覚を見せつけられる。リナは【数字依存症】とよんでいたが、慎吾はそれが【サヴァン症候群】だと突きとめた。

不意にリナは・・・警察官に声をかけられ、固まってしまう。

第5話 初めての事件

第5話 初めての事件

リナ「あ……」

声をかけてきた警官と視線が合い、固まるリナ。

警官「ちよつと聞きたい事があるのですが……
よろしいですか？」

恰幅のよい白髪交じりの中年警官が、リナの顔を覗き込んだ。

リナ「あ……はい？ えつと……何で……しょう？」

緊張しているリナの様子を見た慎吾が、助け船を出す。

慎吾「あ、お巡りさん。お疲れ様です。何かあったんですか？」

笑顔のままいつもと変わらぬ口調で、警官に声をかけた。警官はリナから慎吾に視線を移す。

警官「ああ。実はさっき、局内で盗難事件があったもので。

君たちは……ずつとここにいたかな？」

慎吾「はい。今日、局内見学で……」

首に提げていた、入局許可証を見せる。

慎吾「僕たちは15分ぐらい、ここでおしゃべりしてました。
えつと……その盗難事件って、いつ頃ですか？」

リナに落ち着く時間を与えようと、間髪入れず警官に質問をぶつけた。

警官「うむ。通報が入ったのは今から10分前だが・・・

盗難が発覚したのは、今から30分ほど前。

タレントのバッグが楽屋から消えたらしくてね・・・」

慎吾「タレント・・・？」

警官「ああ、何でも【松浦順】君というタレントのバッ・・・」

突然リナが反応する。

リナ「松順！？ 【山嵐】の松順様のバッグが、盗まれたんですか！？」

急に大声を出したリナに警官は驚いた。

警官「あ、ああ。財布や携帯、その他私物が入ったバッグが・・・

30分程前に盗まれたらしいと通報があつてね」

リナ「マ・・・マジ・・・？」

警官「彼の楽屋から、バッグを持ち出す女性の姿も目撃されていてね・・・」

胸ポケットから、手帳を取りだしペラペラとめくる。

警官「長髪で、帽子を着けた女性が・・・バッグを持ち出したらしい。

そこで今、局内の若い女性を中心に聞き込みをしてるところなんだ。

知り合いにそういう人がいないか。

あるいは、そういう人を見てないか・・・」

リナ「・・・」

思いつきり眉間に眉をひそめたりナ。

リナ「あの・・・どんなバッグですか!？」

警官「真っ白なヤツで、肩にかける大きなスポーツバッグだ」

リナ「白の・・・スポーツバッグ・・・」

ここまで、そのようなバッグを見た記憶はない。

警官「【長髪に帽子】【スポーツバッグ】を身につけた女性だが・・・

警備員からは、そういう人物を見たという情報がなくてね。

まだ局内にいる可能性が高いとみて、聞き込みをしてみるところだ」

リナ「まだ局内に!？ わかりました! 見つけたら捕まえますから!」

迫力のある声を出しながら、リナが身を乗り出した。

警官「いやいや。怪しい人物見たら・・・

局の人に迅速に伝えるか、すぐ110番してくれ。

協力ありがとう。私は行く事にしよう」

慎吾「あ・・・はい・・・」

途中からリナの態度が一変したため、横でチョコンとしていた慎吾がお辞儀をする。警官が立ち去っていく姿を見守った後、リナに視線を移した。

リナは腕組みをしながら、その場で小さな円を描くように歩いている。

リナ「全く・・・松順様のバッグを盗むバカ女がいるなんて・・・

ファンとして最低だわ・・・。何とか捕まえてボコボコに

・・・」

不機嫌な顔で独り言をつぶやいているリナに、慎吾がおそろおそろ声をかけた。

慎吾「あの・・・リナ先輩。ほら、もうすぐ3時。

第16スタジオで、時代劇の撮影風景見学ですけ・・・」

言い切る前に、リナに睨まれる。

リナ「はあ？ 松順様のバッグが盗まれたのよ！

それどころじゃないでしょー！！」

目を丸くする慎吾。

慎吾「え．．．？　僕たちには．．．関係ない．．．かと？」

リナが慎吾の所へ歩み寄り、さらに睨み付ける。

リナ「あんたさあ．．．

あんたなら、どうやってバッグ持ち出したあと逃げる？」

慎吾「え？」

意外な質問を受けた慎吾は、額から汗を流した。

（慎吾「リナ先輩．．．マジで犯人捕まえる気だ．．．」）

慎吾「え、えーっと．．．普通に、玄関か非常口から逃げますけど」

リナ「あんたさあ。本気で考えてないでしょ？」

どの入り口も警備員がチェック入れてるのよ！

泥棒がそんなトコ堂々と通る？」

慎吾「あー、ほら。あえて堂々と通り抜けて、裏をかくって作戦で？」

リナは大きなため息をつく。直後、慎吾に顔を近づけ言い放つ。

リナ「いい？　お巡りさんの話じゃ、でっかいバッグ持った人物が・

・

TV局を出たという、警備員の目撃証言はないのよ？

トイレの窓とか、警備員がチェックしてないところとか・

・

もつとこう・・・犯罪者の気持ちになって・・・」

慎吾「・・・・・・・」

必死なりナの姿を見て、慎吾はちよつと真剣に考える。ふとその場を離れ、TV局内の見取り図がある所へ向かった。何も言わずリナはついてくる。

局内の見取り図を真剣に見つめる慎吾。

慎吾「あの・・・地下駐車場はどうでしょう？」

リナ「はあ？ 私たちがさっき行った時、2カ所もゲートチェックあつたじゃない」

慎吾「ええ。でも確か駐車場の入り口横に・・・」

【STAFF ONLY】のエレベーターがあつたじゃないですか。

見取り図で言うところですよ」

地下駐車場の出入り口横にある、エレベーターの位置をさす。

慎吾「ここならタレントさんの楽屋から、チェック無しで駐車場へ行けます。」

多分これ、タレントさんがすぐに移動できるようについてい
う・・・

関係者専用というか、芸能人専用エレベーターじゃないか
など・・・」

リナも見取り図を確認する。確かにこのエレベーターを使えば・・・
中に入る際も、チェック無しで局内に入ることが出来る。

リナ「ふん・・・やつと真剣に考えたわね。でも残念。」

駐車場は許可車しか止められないのよ。

駐車場から外へ出る際も、警備員がチェックするし」

慎吾「うん・・・」

右手の手のひらを額にあてた慎吾。

慎吾「いや・・・出来ます。まず僕たちみたい・・・

局内見学の手続きをして、この入局許可証を手に入れる」

首にぶら下げた入局許可証を握りしめながら説明を続ける。

慎吾「その許可証を持って一度外を出て・・・

今度は車で地下駐車場から入る」

リナ「・・・」

慎吾「そしてこのエレベーターを使い、目的の楽屋に入り・・・バ
ッグを盗む。」

その後も同じエレベーターを使い、駐車場へ行き・・・

駐車場を出る時にチェックは入りますが・・・
バッグはトランクの中だから目撃されない・・・どうです
？」

腕組みをしたまま、リナは真剣に聞き入った。

リナ「ふむ・・・アリね、その推理。

なるほど・・・駐車場のエレベーター。うん・・・

待つてよ・・・そういえば・・・」

何かを思い出したような表情を浮かべる。

リナ「そういえば・・・さっき駐車場を見た時・・・

1台だけ変な車・・・あつたのよね」

慎吾「変な車？」

リナ「【わ】ナンバーよ。関係者が停める駐車場に【わ】ナンバーは場違いだわ。

それにエンジンがかつてたのに、誰も乗ってなかった・・・
超怪しい！」

慎吾「えっと・・・確か、【わ】ナンバーって、レンタカーでしたよね？」

リナ「そう。おそらく・・・犯人の車じゃない？」

目を大きく開いた慎吾。

慎吾「ありえますね。偽名で借りた車を使って逃走し・・・

そのままレンタカーを返して逃げれば、足はつかない。

エンジンかかっていたのは、すぐに逃走できるよう・・・」

リナ「うん。あの車ね・・・怪しいのは。よし!」

そういうとリナは、ノートパソコンを取り出し起動する。

慎吾「・・・?」

慎吾が黙ってその様子を見てみると、リナはキーボードをカタカタと打ち始めた。

リナ「さて・・・」

慎吾「あの・・・パソコンで・・・何かわかるんですか?」

リナ「わかるわよ・・・。この近辺で、レンタカー扱ってる店探すのよ」

慎吾「え? でも、それで犯人を捕まえられますか?」

リナはキーボードを打ちながら慎吾を見る。

リナ「あんたさあ・・・なんか秘密ある? 人に言えないような」

意表をついたリナの質問に、慎吾は一瞬身をひいた。

慎吾「え？ 何でまた急に・・・？」

リナ「いいから！ これは人に言えない！！ってな秘密はあんの？」

慎吾は困惑した表情を浮かべる。

慎吾「えつと・・・ あの・・・」

意を決したように慎吾は口を開く。

慎吾「僕・・・霊が見えます！！」

直後、リナは非常に残念そうな顔をした。

リナ「あんたさあ・・・嘘つくならもうちょっと・・・

まあいいわ。あんた、巧妙な嘘とかつけそうにないし。

いい？ 今から私がする事は・・・絶対人に言っちゃダメよ！」

リナは慎吾を睨み付ける。

慎吾「え・・・？ は、はい。わかりました・・・

何を・・・するんです？」

リナ「ほら、これ見て。近くのレンタカーの店のページ。

ここから社員専用のページに潜り込むの。

つまりパスワードが必要なリンク先ね」

パソコンの画面を見せながら説明する。

慎吾「ええ？ ちょっと待ってくださいよ。」

まず1つ、どうやって潜り込めるんですか！？

そういうとこって・・・

IDとかパスワードとか必要じゃないんですか？」

リナ「ふん。本格的なセキュリティは導入してないわよ、こんな所。

まずIPアドレスからFTPサイトを特定・・・」

喋りながらも高速でキーボードを打ち続ける。

リナ「私の組んだアルゴリズムのプログラムで・・・

ちよつとサーバにお邪魔して・・・パスワード保護を回避・

・

って言うてもあんたには理解できないわね」

慎吾「ええ！？ ハッキングですか！？ それ？」

リナは首を横に振る。

リナ「私から言わせれば・・・

簡単にハックできるセキュリティシステムの方が悪いわ。

私は・・・なんだっけ？ サバンナ症候群なのよ！」

慎吾「サヴァン症候群ですよ」

リナ「そう、それ！

サイト1つ1つのページが、数字の情報で頭に入ってくるもの。

高度なセキュリティでない限り、どこにだって侵入できるわ」

慎吾「すごいけど・・・でも・・・」

リナ「だから、絶対誰にも言わないでよ！ あんただから言ったのよ！」

慎吾「え・・・？ 僕だから・・・？」

リナ「そう！」

慎吾「・・・」

首をかしげる慎吾。

リナ「別に深く考えなくていいから。あんたを信用してるって事よ」

慎吾「わ・・・わかりました。

でも・・・レンタルした人の情報を、ネット上に残すですよっか？」

リナ「当たり前じゃない！ あんたさあ、何も知らないでしょ！」

慎吾「は、はい・・・」

正直に頷く慎吾。

リナ「レンタカーってのは、同じ系列店舗なら・・・

借りた所と返す場所が違ってても大丈夫なのよ！

長崎でレンタルした車は、熊本でも返せるの！」

慎吾「え？ そ、そんなんですか！？」

リナ「だからレンタルした客の情報は・・・

ネット上でやりとりするのが常識！」

慎吾「知らなかった・・・でもどうやって・・・

その車を探すんですか？ 登録名も偽名だろうし」

リナ「だーからー！ 一度見た車のナンバーは忘れないのよ私は！

あの【わ】ナンバーの車もちゃんと覚えてるってば・・・

ほら、あつたー！！」

ハッキングしたレンタカーのとある店舗。その顧客情報ページを、
慎吾に見せた。

リナ「あれ？ でもおかしいわね・・・借りたのは一人で・・・

男だわ・・・弘ひろしって名前の」

慎吾「……」

リナと共に、その車を借りた人物の情報を凝視する。

リナ「名前は偽名だとしても……」

車レンタルする時、女装するとは思えないな」。

犯人は女性だから……シロ……？」

慎吾はそのページ情報を睨み付けたまま……

慎吾「いえ……間違いないと思います。彼が犯人ですよ」

口を開いた。

リナ「え？ 何故？」

慎吾「帽子と長髪の女性が犯人って聞いた時、違和感ありました。

犯人が疑われないようにする、典型的なパターンにあるんですよ。

性別を偽るつてのが……」

リナ「そうか……犯人の方を女性と思わせれば……男は疑われない」

慎吾「リナ先輩、駐車場に行ってみましょう。その車があるかどうか確認しに」

リナは慎吾を見て軽く笑う。

リナ「必要ないわ。その車、今からおよそ5分後に・・・

赤坂にあるレンタカーの店に到着する」

慎吾「え？ 何故・・・」

リナ「レンタカーにGPSがついてるのは常識。

逆に貸した側も、貸した車の位置がわかるようにしているのも常識よ。ほら」

リナが示したページには、地図上を走る光の点滅があり・・・それが例の車だと言う。

その点滅は、あと数分で赤坂のレンタカー店に到着しようとしていた。

慎吾「で、でも、どうするんです？

どうやってその人を・・・捕まえるんですか？」

リナ「はあ？ そんなの簡単よ」

慎吾の目の前で、手のひらを上にして見せる。

リナ「携帯」

慎吾「え？」

リナ「あんたの携帯貸して」

慎吾「あ・・・はい」

慎吾はジーンズの左ポケットから携帯を取り出しリナに渡した。
リナは即座に「1」「1」「0」とプッシュし、慎吾に返す。

慎吾「え！？　ちょ・・・110番！？　どうするんですか？」

リナ「赤坂のレンタカー店に、お巡りさんを向かわせて」

慎吾「え！？　どんな風にお巡りさんに言えば・・・

あ！　はい！　もしもし！　えっと・・・

僕は慎吾って言いますが・・・

あの・・・赤坂のレンタカーの店にですね・・・」

リナは自分の携帯電話を使い、赤坂のレンタカー店へ電話をかけた。

リナ「あ！　こちら赤坂警察署です。ちょっと情報が入りましてね。

「23 - 〇」ナンバーの車をレンタルしてる客がですね・
・

盗難事件関与の疑いがありまして・・・はい・・・そうです
す」

慎吾「そ、そうです。犯人がそのレンタカー店に・・・」

リナ「ええ、もしその客がそちらに現れましたら・・・

しばらくの間、足止めしてください。

ええ・・・そうです。5分でそちらに向かいますので」

こうして・・・

ジャネーズの人気アイドルグループ【山嵐】のメンバー松浦順・・・

彼のバッグを盗難した犯人は、犯行からわずか90分で捕まる事になる。

しかしこの事件解決がきっかけで・・・

2人はさらに大きな事件に巻き込まれる事など・・・

まだ知る事はない。

（第6話へ続く）

第5話 初めての事件（後書き）

次回予告

リナの活躍で、アイドルバッグ盗難事件の犯人を逮捕。
思わず警察に名前をもらった慎吾は、事情聴取を受ける事になってしまった。

そこで日本のトップアイドル【松浦順】と会おう事になる。
その彼と初対面したリナは・・・？

次回 「第6話 運命の出会い」

第6話 運命の出会い（前書き）

慎吾のスピリチュアル事件簿 First season

「徳川埋蔵金の謎」

前回までのあらすじ

2012年4月。大学生となった慎吾は、大学の講義で1つ上の先輩リナと出会う。課題のため、TV局へと向かった2人だが・・・
アイドルのバッグ盗難事件に遭遇。リナの持つ特殊能力により、犯人を捕まえるに至った。

第6話 運命の出会い

第6話 運命の出会い

リナ「ったく……。あんたさあ……」

ホント間抜けよねー」

腕組みをしたリナが、大きなため息をつく。

慎吾「し、仕方ないじゃないですか……」。

リ、リナ先輩が急に110番するから……」

2人はTVSのとある一室で、ある人物を待っていた。

リナ「は……」

タレントの【松浦順】バッグ盗難事件を解決した2人。慎吾は110番で犯人情報を提供した際、自分の氏名と電話番号まで警官に伝えてしまった。

リナ「あんたさあ……。あーいうのは、匿名でいいのよ、匿名で。」

最悪、電話番号は教える必要ないっつーの!」

警官側から折り返し電話を受けた慎吾は、TVSのとある一室で待つように指示される。今回の盗難事件に関し、事情聴取を受けるためだ。

慎吾「あー……。僕、お巡りさんに何て言えば……?」

右手の拳をトントンと軽く頭に叩きながら、悩むそぶりを見せる。

リナ「知らない。アドリブで何とかしてよ。

ヘタな事言って、帰るの長引くのはゴメンだからね！

てか、マジ長引いたら・・・あんた置いて帰るから」

冷たく言い放つリナは、今回の事件解決の中心人物であつたが・・・
警官側には一切自分の身元情報を伝えてない。

リナ「さて・・・あたしは局内ブラブラして・・・

イケメン芸能人と【運命的な出会い】でもしてこようかしら」

そつ言つと部屋の出口へと向かつた。

慎吾「ちょ・・・リナ先輩・・・」

泣き顔でリナの後を追おうとする。後ろを振り返つたリナは・・・

リナ「はい！ これも勉強の1つ！ 頑張つて事情聴取されてね！」

満面の笑みを浮かべた。瞬間、思いつきり怖い表情になる。

リナ「いい？ あたしは今回の事件、一切関わってないから。

絶対、あたしの名前出さないでよ！！」

慎吾「は・・・はい・・・」

慎吾の困惑した顔を確認したリナは、再び笑顔になる。

リナ「じゃ、私はこれで。

運命の出会いの旅に・・・いざ出発」

言いながらドアノブに手をかけようとした。

ガチャツ。

ドアノブに触れる直前、部屋の外側から扉が開けられる。そして一人の警官が、部屋の中に入ってきた。

リナ「あら・・・お巡りさん。

意外と早かつ・・・た・・・わ？」

警官と目があつた瞬間、言葉に詰まるリナ。そして口を【わ】の形に開けたまま固まった。

慎吾は、入ってきた警官を見て緊張する。

慎吾「あ！ お、お巡りさん！！ ぼ、僕は慎吾って言いました・・・」

1つの乱れもない警官服をビシツと着こなし・・・少し外側に跳ねたクセつ毛、日本人離れた端正な顔立ちはヨーロッパ系のハーフかと思わせる。

その警官は慎吾と目を合わせ口を開く。

男「はは。お巡りさんに見える？ だとしたら嬉しいなあ」

リナの視線は・・・透き通るような声のその男に、釘付けのままだ。

男「初めまして。俺は松浦順。お巡りさんでなくてタレントなんだ。

ドラマの撮影でこんな格好してるだけさ」

一瞬「え？」という顔をした慎吾。

慎吾「あー！！ バッグ盗まれたタレントさんですね！ 初めまして！」

慎吾は深々とお辞儀をした。

松浦「はは・・・ そう、バッグ盗まれた間抜けなヤツさ」

慎吾「あ、いえ！ そんなつもりでは・・・」

軽く頭をかいた松浦は、慎吾の目を見て笑顔を見せる。

松浦「お巡りさんから聞いてるよ。本物のね。

犯人捕まえたの・・・君だって？」

慎吾「え、あ・・・」

松浦「心から礼を言うよ・・・」

そついうと松浦は右手を慎吾の前にさしだし、握手を要求した。

慎吾「・・・」

握手に応じた慎吾は、困った表情を見せる。

慎吾「あー、いえ。はい・・・」

事件解決の一番の功労者は・・・リナ。彼女がいなければ、間違いなく犯人は逃走していた。

でもリナは、今回の事件に関わっていない事になっている。慎吾はリナに視線を向けたが、口を開けたまま松浦を見つめ・・・固まり続けていた。

慎吾「・・・」

そんなリナを見て、慎吾は意を決する。

慎吾「ええ。でも僕は・・・」

犯人を見つけた後、どうしたらいいかわからなくて・・・」

リナの方に視線を合わせたまま・・・

慎吾「リナ先輩が、警察や警備員に連絡するように言ってくれたんです。」

リナ先輩がいなかったら・・・パニックって犯人逃がしてました」

笑顔で説明する。

松浦「・・・」

松浦の視線は・・・慎吾から、赤いメガネの女性へと移る。そして

呆然としたままのリナへと、ゆっくりと歩み寄っていった。

松浦「・・・・・・・・」

リナの真正面に立った松浦は、さわやかな笑顔をふりまく。

リナ「あ・・・・・・・・」

目の前に、あこがれのアイドルがいる。

さわやかな笑顔の松浦は、リナから視線をそらさず・・・

優しくハグした。

松浦「ありがとう。君がいなければ・・・ホントに感謝してるよ」

ハグしたまま、リナの耳元で囁く。

その後リナの両肩に手を置き、真正面から目を見つめる。

松浦「ありがとう」

2度目の感謝の言葉を囁いた。ステキな笑顔を見せた後、慎吾の所へと戻っていく。

リナ「・・・・・・・・」

リナの心臓はバクバクと激しく動悸し、全身の鳥肌が立った。松浦

に声をかけようと脳が命令するのに、体がそれを拒否する。

リナ「……………」

ただ……その場で固まる事しかできなかった。

松浦「バッグには携帯も入ってたから、焦ってたんだ。

アイドルとか芸能人の情報が、1000以上も入ってたさ。

あれが一般人に出回ったらと思うと……

バッグが戻ってきて、ホントよかったよ」

慎吾「……………」

感謝の言葉をさらっと言える松浦を見て、慎吾は好感を持った。

ガチャッ。

直後、部屋には……本物の警官が入ってきた。

その後……無関係者のリナは、部屋の外に出され……

松浦や松浦のマネージャ、それに慎吾と2人の警官による事情聴取が行われた。

慎吾は……

たまたま駐車場で見かけた男が白いバッグを持って、急ぎ足でレン

タクシーに乗り込む姿を見た・・・

そこで慌てて110番したというシナリオを、しどろもどろで警官に説明した。

・・・。

約1時間・・・事情聴取は終了した。

警官らが部屋から出た後・・・松浦と慎吾が出てきたのはその30分後。

慎吾「とにかく大事おおごとにならなくて何よりです」

松浦「ああ。またどこかで会うことがあれば絶対声かけて」

慎吾「はい！」

笑顔のまま元気よく応えた慎吾は、数m離れた所にリナがいるのに気づいた。

カベを背に立っていたリナ。2人が出てきたのを見て近寄ってくる。

慎吾「あ！ リナ先輩！ え？ まさかずっといたんですか！？」

・ リナは慎吾を無視して松浦の正面に立った。そして深く頭を下げ・

リナ「握手してください！」

両手を松浦の前に出した。

一瞬驚いた表情を見せた松浦だが、

松浦「OK」

優しい声で返し、リナの両手を握り返す。

リナ「は．．．．．」

手を握られたリナは、顔を松浦に向けた。

松浦「リナ。ありがとう」

待つてましたとばかりに、さわやかな笑顔を作り．．．リナの瞳を直視する。

リナは無意識に口が開き、

リナ「ふあゝ．．．」

気の抜けた声を出す。

松浦は握手を解こうとするが、リナがそれを許さない。しかしそこは、日本を代表するアイドル松浦。

強引に．．．リナの手をふりほどき、今度は慎吾と握手をした。リナの手を無理矢理ほどいたそぶりを全く見せない、握手から握手への

自然な流れ。

リナ「……………」

慎吾はリナに睨み付けられているのに気づかない。松浦は握手を解いた後、慎吾に質問した。

松浦「そういえば……」

大学のレポート課題のため、TV局に来たと言ってたね。

何か面白いものは見たかい？」

慎吾「あ、いえ……。実はまだどこも見なくて……」

ふと廊下の向こうのロビー……。柱にかかっている時計が目に入っ
た。

慎吾「あ……。もう6時回ってるや……」

ニュースの生放送を見学する予定だったが……。間に合う時間ではない。

松浦「えー、ひょっとして……。俺のせいで、何も見られなかった
!？」

慎吾「ま、まさか……。違いますよ」

慎吾は不自然な笑顔で返事する。

松浦「そうか……。悪いことしたね……」

慎吾の下手な笑顔は、松浦に通じない。自分のせいで、慎吾達の予定を台無しにしたと確信した松浦は・・・

松浦「よし!!」

思い立った声をあげると、側に立っていたマネージャとヒソヒソ話を始めた。

時折、慎吾とリナに視線を向けながら・・・。

話が終わった後、慎吾に声をかける。

松浦「君達さえよければだけど・・・

あさつての5月5日。TVSの特別番組の収録があつてさ。

俺ら【山嵐】がスペシャルゲストなんだけど・・・
観客席に、君たちを招待するよ」

慎吾「え!? ホントですか!？」

驚いた声をあげる慎吾。

松浦「俺のドジで・・・君たちは何も見学出来なかったし・・・
それじゃあ、レポート書けないだろうしさ」

リナ「行きます! 行きます! 絶対行きます! お願いします!
!」

松浦と慎吾の間にリナが割って入ってきた。

リナは松浦の手を握ろうとしたが、松浦はさりげなくポケットに両手を入れてそれを拒否する。

松浦「じゃあ決まりだな。マネージャが今から招待状渡すからさ」
言いながら目線で、マネージャに合図をする。

松浦「それと、1つ約束してくれないか？

必ず収録前に・・・俺にあいさつしに来て欲しい。

それだけ。いいね？」

リナ「はい！ はい！！！」

慎吾「わかりました」

2人はマネージャから招待状を受け取った。そして松浦は、右手で「グッバイ」の合図をしてマネージャと共に去っていく。

リナは去りゆく松浦に、いつまでも大げさに手を振っていた。

満面の笑みを浮かべるリナに、慎吾が声をかける。

慎吾「でもよかったですね。憧れの松浦さんにハグされて」

リナは眉をひそめて、慎吾を見た。

リナ「え？ 何言ってるの？ 握手しかしてないわよ、私」

慎吾「いやいや・・・最初ハグされてたじゃないですか・・・」

リナ「嘘！　なんでそんな嘘つくの！？」

慎吾「え？　いや・・・だつて・・・」

ひよつとして、記憶ないんですか？　ハグされた時の？」

リナは両手で頭を抑え、思い出そうとするそぶりを見せる。

慎吾「あの・・・どこまで記憶があります？」

リナ「えつと・・・」

運命の出会いを探しに、部屋を出ようとして・・・

気がついたら、部屋から出てきた松順様と握手した・・・」

慎吾「うわ！　その松順様がリナ先輩ハグしたんですよ！

あんなに記憶力すごいのに・・・

一番いい思い出だけ、欠損してるんですか！？」

リナは両手で頭を抑えて叫んだ。

リナ「うそー！　絶対うそー！！　でもあんな嘘つかないし・・・

日本で唯一松順様のハグを受けたのに、何で記憶ないの！

！！」

慎吾「いや・・・唯一じゃないと思いますけど・・・」

この調子で2人は・・・

TV局の出口へと向かっていった。

リナ「あ、ちょっと待って。化粧直し行ってくるから」

若干冷静さを取り戻したリナが化粧室を探す。

慎吾「あ、あっちにあるみたいです」

トイレ表示を見つけた慎吾が、その方向を指さす。

慎吾「じゃあ僕、この辺で待ってますね」

リナを見送った後、慎吾は先ほどもらった招待状を見た。

慎吾「・・・」

見た瞬間、慎吾の表情が一瞬固まる。

招待状には、松浦のマネーギャのサインと・・・

特別番組の番組名と収録時間が書かれているだけだった。

その番組名は・・・

【10年ぶりに復活！ 徳川埋蔵金を追え！ ついに発見！？】

慎吾「・・・」

招待状から目が離せない。

慎吾「徳川・・・埋蔵金か・・・」

軽くため息をついき、天井に視線を移した。

慎吾「・・・・・・・・」

じつと蛍光灯の光を見つめる。

「驚いたな」

ふと慎吾に声をかける者がいた。

慎吾「え？」

視線を正面に戻すと・・・男が立っている。

慎吾「・・・・・・・・」

この男こそ・・・後の慎吾の運命を大きく変える人物。

慎吾にとってはまさに・・・運命的な出会だった。

（第7話へ続く）

第6話 運命の出会い（後書き）

次回予告

招待状を見つめながら、考え事をする慎吾に声をかけた男。
その男は慎吾に意味ありげな言葉をかけてくる。

後に慎吾の運命を大きく揺るがす事になる、彼の正体は・・・？

次回 「 第7話 スピリチュアル・カウンセラー 」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5975x/>

徳川埋蔵金の謎

2011年10月21日03時02分発行